

対称ポテンシャル流の非安定性について

名古屋大学 教養部数学教室  
竹下 彬

[I] Summary

3次元ユークリッド空間に於ける同心球面間の領域に於ける定常 Navier-Stokes 方程式の解  $X^{(k)} = \alpha \text{grad}(\frac{-1}{r})$ ,  $p^{(k)} = -\frac{1}{2} \rho \alpha^2 r^{-4}$  の安定性を調べる。充分大なる  $\alpha$  に対してこの  $k$  に対してこの解は不安定で、 $n \rightarrow \lim_{k \rightarrow \infty} (\text{dimension of instability subspace of } X^{(k)}) = \infty$  である事を示す。

[II]. 3次元 Navier-Stokes 方程式及びそれに関する結果.

§ II-1 Navier-Stokes 方程式

$E_3$  を 3次元ユークリッド空間,  $(x_1, x_2, x_3)$  をそのデカルト座標系とする。  $e_1, e_2, e_3$  を夫々  $x_1, x_2, x_3$  軸に平行で各軸に於ける長さが 1 の  $E_3$  に於けるベクトル場を表わすものとする。  
 $\Omega$  を  $E_3$  の有界領域でその境界  $\partial\Omega$  は  $C^\infty$ -級であるとする。  $\mathcal{F}(\Omega)$  で  $\Omega$  上のベクトル場全体を表わす。

$\Omega$  に於ける Navier-Stokes 方程式は次の様に表わされる。  
先ず非定常方程式は,  $X = X(x, t); (x \in \Omega, t > 0)$  とし

$$(NSE) \begin{cases} \frac{\partial X}{\partial t} = \nu \Delta X - \nabla_X X - \frac{1}{\rho} \text{grad } p + f(x, t), \text{ in } \Omega, t > 0 \\ \text{div } X = 0 \\ X(x, 0) = a(x) \\ X(x, t) \Big|_{x \in \partial\Omega} = b(x, t) \end{cases}$$

又、定常方程式は  $X = X(x) \quad (x \in \Omega)$  とし

$$(SE) \quad \begin{cases} \nu \Delta X - \nabla_X X - \text{grad} p + f(x) & \text{in } \Omega, \\ \text{div} X = 0 \\ X|_{\partial\Omega} = \theta(x) \end{cases}$$

で表わされる。但し、未知関数はベクトル場  $X$ 、及び実数値関数  $p(x, t)$  (圧力) で、外力  $f(x, t)$ 、初期値ベクトル場  $a(x)$  及び境界値  $\theta(x, t)$ ,  $\theta(x)$  は既知項である。又  $X = \sum_{i=1}^3 X_i \cdot e_i$  とすると

$$\frac{\partial X}{\partial t} = \sum_{i=1}^3 \frac{\partial X_i}{\partial t} e_i, \quad \Delta X = \sum_{i=1}^3 \Delta X_i e_i = \sum_{i=1}^3 \left( \sum_{j=1}^3 \frac{\partial^2 X_i}{\partial x_j^2} \right) e_i,$$

$$\nabla_X X = \sum_{i=1}^3 \left( \sum_{j=1}^3 X_j \frac{\partial X_i}{\partial x_j} \right) e_i \quad (= (X \cdot \nabla) X \text{ と表わすことも可い})$$

である。  $\nu, \rho$  は正の定数である。

既知項に対する適合条件としては  $\text{div} X = 0$  より  $\text{div} a = 0$ 、及び Gauss-Stokes の公式より直ちに従う

$$\int_{\partial\Omega} \theta(x) \cdot n(x) dS = 0$$

が課せられる。但し、 $n(x)$  は  $\partial\Omega$  の unit exterior normal,  $dS$  は  $\partial\Omega$  の面積要素とする。

(注1) 尚、後に向題の複素化を考える迄は全ての量は実数の範囲で考える。即ち、実数値関数、実ベクトル場等々。

(注2) 記号に因する約束としてベクトル量に因する記号は以後全て肉大文字で表わす事にす。  $X, Y, L^2, H^1$  等。

### § II-2. 幾つかの関数空間及び作用素.

$C_c^\infty \equiv C_c^\infty(\Omega)$  で  $C^\infty$  級のベクトル場  $\Phi(x) \in \mathcal{X}(\Omega)$  で  $\text{supp}(\Phi)$  が  $G$  で compact かつ  $\text{div} \Phi \equiv 0$  とするもの全体を表わす。  $L^2 \equiv L^2(\Omega)$  で可測なベクトル場  $X = \sum_{i=1}^3 X_i e_i \in \mathcal{X}(\Omega)$  で  $\|X\|^2 \equiv \int_{\Omega} \sum_{i=1}^3 X_i(x)^2 dx < \infty$  とするもの全体をなす

Hilbert space を表わす。 その内積を  $(\cdot, \cdot)$  で表わす。

$$(X, Y) = \sum_{i=1}^3 \int_{\Omega} X_i(x) Y_i(x) dx.$$

$C_c^\infty \subset L^2$  であり  $L^2$  のノルムに関する  $C_c^\infty$  の closure を  $L_\sigma^2 \equiv L_\sigma^2(\Omega)$  で表わし、その  $L^2$  に於ける直交補空間を  $L_\pi^2 \equiv L_\pi^2(\Omega)$  で表わす。 この時次の補題が成り立つ。

#### 補題 1

(1)  $X \in L^2(\Omega)$  が  $X \in L_\pi^2$  である為の必要かつ十分条件は

$$\text{div} X = 0 \text{ in } \Omega \text{ (distribution sense)}$$

及び  $H^{-\frac{1}{2}}(\partial\Omega)$  の意味で normal component of  $X|_{\partial\Omega} \equiv 0$  on  $\partial\Omega$  である。

(2)  $X \in L^2(\Omega)$  が  $X \in L_\sigma^2$  である為の必要かつ十分条件は

scalar function  $f = f(x)$  で  $f \in L^2_{loc}(\Omega)$ ,  $\frac{\partial f}{\partial x_i} \in L^2(\Omega)$ ,  $i=1,2,3$   
 の場合  $\mathbf{X}$  の存在は?  $\mathbf{X} = \text{grad } f$  が成立する事である。

$L^2$  より  $L^2_\sigma$  及び  $L^2_\pi$  上への直交射影を夫々  $P_\sigma$  及び  $P_\pi$   
 で表す。  $W^m \equiv W^m(\Omega) \equiv \{ \mathbf{X} = \sum_{i=1}^3 X_i(x) \mathbf{e}_i \in \mathcal{X}(\Omega); X_i \in W^m(\Omega) \}$ ,  
 $H^m \equiv H^m(\Omega) \equiv \{ \mathbf{X} = \sum_{i=1}^3 X_i(x) \mathbf{e}_i \in \mathcal{X}(\Omega), X_i \in H^m(\Omega) \}$  とし  
 $\mathcal{X} \in W^2 \cap H^1 \cap L^2_\sigma \equiv \mathcal{D}(A)$  に対し

$$A\mathbf{X} = -P_\sigma \Delta \mathbf{X}$$

とおくと  $A: \mathcal{D}(A) \rightarrow L^2_\sigma$  は strictly positive self-adjoint  
 operator となる。

此の作用素  $A$  は Stokes operator と呼ばれる。

§ II-3 Navier-Stokes 方程式の解の存在と一意性に関する  
知られている結果。

Navier-Stokes 方程式に於いて境界値  $\mathbf{G}(x, t)$ ,  $\mathbf{G}(x)$  の  $G$  の  
 内部への divergence free の extension  $\mathbf{C}(x, t)$ ,  $\mathbf{C}(x)$  とすると  
 (NSE), (SE) は夫々次の方程式 (NSE'), (SE') に帰着される。

$$(NSE') \quad \begin{cases} \frac{d\mathbf{X}}{dt} = -A\mathbf{X} - P_\sigma [(\mathbf{X} \cdot \nabla) \mathbf{X} + (\mathbf{C} \cdot \nabla) \mathbf{X} + (\mathbf{X} \cdot \nabla) \mathbf{C}] + P_\sigma (\mathbf{f} - (\mathbf{C} \cdot \nabla) \mathbf{C}) - A\mathbf{C} - P_\sigma \frac{d\mathbf{C}}{dt} \\ \mathbf{X}(0) = \mathbf{a} \end{cases}$$

$$(SE') \quad A\mathbf{X} + P_\sigma [(\mathbf{X} \cdot \nabla) \mathbf{X} + (\mathbf{C} \cdot \nabla) \mathbf{X} + (\mathbf{X} \cdot \nabla) \mathbf{C}] - P_\sigma (\mathbf{f} - (\mathbf{C} \cdot \nabla) \mathbf{C}) + A\mathbf{C}$$

方程式 (NSE') の解の存在と一意性の間 (2.2.1) の結果  
 (1) 次 - 挿入を代える。

定理 (正則解の局所的な存在及び一意性),  $f, g$  は共に  
 $C^\infty$ -級とする。  $\tau > 0$  及び  $a \in \mathcal{D}(A^{\frac{1}{4}})$  に対し  $\tau > 0$  が  
 存在し  $X(t) \in C([0, \tau]; \mathcal{D}(A^{\frac{1}{4}})) \cap C((0, \tau]; \mathcal{D}(A)) \cap C^1((0, \tau]; L^2) \equiv \mathcal{W}$   
 が存在し方程式 (NSE') を満たす。又此の方程式の解は  
 $\mathcal{W}$  で unique である。

定理 (E. Højf の弱解の大域的な存在)  $f, g$  は共に  $C^\infty$ -級  
 とする。此の時任意の  $a \in L^2_\sigma$  に対し

$X(t) \in C([0, \infty); L^2_\sigma) \cap L^2_{loc}((0, \infty); \mathcal{D}(A^{\frac{1}{2}}))$  が存在し  
 任意の  $\varphi(x, t) \in C^{0, \infty}([0, \infty) \times \Omega)$  に対し等式

$$\begin{aligned} (a, \varphi(0)) + \int_0^\infty (X, \frac{d\varphi}{dt}) dt &= \int_0^\infty (A^{\frac{1}{2}} X, A^{\frac{1}{2}} \varphi) + \int_0^\infty \int_\Omega \sum_{i,j=1}^3 \frac{\partial X_i}{\partial x_j} X_j \varphi_i dx dt \\ &\quad + \int_0^\infty ((c \cdot \nabla) X + (X \cdot \nabla) c + (c \cdot \nabla) c - f + A c + \frac{dc}{dt}, \varphi) dt \end{aligned}$$

を満足す。但し,  $C^{0, \infty}([0, \infty) \times \Omega)$  は  $\varphi = \varphi(x, t) = \sum_{i=1}^3 \varphi_i(x, t) e_i$   
 であり  $\varphi_i(x, t) \in C^{0, \infty}([0, \infty) \times \Omega)$ ,  $i=1, 2, 3$  かつ  $\operatorname{div} \varphi = 0$  となる  
 $\varphi$  の全体からなる集合とする。

### [III] Sattinger の結果

此處に D.H. Sattinger の論文, The Mathematical Problem of Hydrodynamic Stability, (Journal of Mathematics and Mechanics, Vol. 19, No. 9 (1970), pp. 797-817) から後の議論の背景となる部分の結果を述べる。

$X^{(0)} = X^{(0)}(x)$  を定常方程式 (SE) の解とする。此の解が安定であるか否かは非定常方程式 (NSE) に於いて初期値を  $a(x) = X^{(0)} + X^{(1)}$  で与えた時の解を  $X^{(0)}(x) + X(x, t)$  とすると  $X(x, t)$  が  $t$  と共に減衰するか否かである。  $X(x, t)$  の境界値が零である事を考慮すると、これは発展方程式

$$(EE) \begin{cases} \frac{dX}{dt} = -AX - P_0[(X \cdot \nabla)X + (X^{(0)} \cdot \nabla)X + (X \cdot \nabla)X^{(0)}] \\ X(0) = X^{(1)} \end{cases}$$

の解を調べる事に成る。これを  $X=0$  の近傍で線型化すると

$$(LEE) \begin{cases} \frac{dX}{dt} = -AX - P_0[(X^{(0)} \cdot \nabla)X + (X \cdot \nabla)X^{(0)}] \\ X(0) = X^{(1)} \end{cases}$$

が得られる。  $\mathcal{P} \in \mathcal{B}(A)$  に対し、

$$L\mathcal{P} = -A\mathcal{P} - P_0[(X^{(0)} \cdot \nabla)\mathcal{P} + (\mathcal{P} \cdot \nabla)X^{(0)}]$$

とおく。此の作用素  $L$  は一般に self-adjoint ではない。そこで問題を複素化する。これまでに述べた関数空間、作用素等必要に応じて修正を行つたとして今迄通りの記号を用いる。

補題 (Sattlinger)

- (1)  $L$  のスペクトルは有限多重度の実スペクトルのみより成り  
 $\infty$  以外に集積しない。  
 (2)  $L$  のスペクトルは複素平面で右に凸な或は放物線の内部に  
 含まれる。  
 (3)  $L$  の generalized eigen space は  $D(A^{1/2})$  (graph topology を与え  
 て) complete である。

次に非安定性の定義を述べる。(注: 実の範囲である)

定義 定常解  $X^{(0)}$  が非安定であるとは  $\varepsilon_0 > 0$  が存在して  
 任意の  $\delta > 0$  に対し、次の (i) (ii) を満たす  $X^{(1)}$  が存在する事である。

(i)  $X^{(1)} \in L^2_\sigma$  かつ  $\|X^{(1)}\|_{L^2_\sigma} < \delta$

(ii)  $X^{(1)}$  を初期値とする (EE) の Hopf solution が存在して  
 或る  $t_0 > 0$  に対して  $\|X(\cdot, t_0)\|_{L^2_\sigma} > \varepsilon_0$ 。

定理 (Sattlinger)  $X^{(0)}$  は定常 Navier-Stokes 方程式の解と  
 し、 $L$  の固有値  $\lambda$  で  $\operatorname{Re} \lambda > 0$  となるものが少くとも一つ存在  
 するとする。此の時  $X^{(0)}$  は非安定である。

此処で後の議論の為に次の定義をしておく。

定義  $\lambda \in \sigma(L)$  (spectrum of  $L$ ) に対して  $\lambda$  の generalized  
 eigen space を  $\Pi(\lambda)$  とし、 $W = \bigoplus_{\substack{\lambda \in \sigma(L) \\ \operatorname{Re} \lambda > 0}} W(\lambda)$  において  $X^{(0)}$  の  
 unstable subspace と呼ぶ。

### [IV] 向題とその対称性.

§ IV-1. 向題の設定  $\Omega = \{x \in E_3; r_1 < |x| < r_2\}$  とおく. 任意の  $\alpha \in \mathbb{R}$  に対し  $X^{(\alpha)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{1}{r})$ ,  $p^{(\alpha)} = 2\rho\alpha^2 \int_r^r r^{-5} ds$  とおく. 但し,  $r = |x|$ . 此の  $X^{(\alpha)}$ ,  $p^{(\alpha)}$  は次の Navier-Stokes 方程式

$$(SE_\alpha) \begin{cases} \nu \Delta X - \nabla_X X - \frac{1}{\rho} \operatorname{grad} p = 0 \\ \operatorname{div} X = 0 \\ X|_{\partial G} = X^{(\alpha)}|_{\partial G} \end{cases}$$

の解となつてゐる. 此の解の安定性を調べるが; 即ち  $unstable\ subspace \neq \{0\}$  かどうか調べるのが本稿の目的である.

以後  $X^{(\alpha)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{1}{r})$  を対称ポテンシャル流と呼ぶ事にする.

### § IV-2. 対称性

此処では先に設定した向題の持つ対称性について述べる. 以後本稿を通し  $G$  で 3次元回転群を表わす事にする.

$E_3$  のデカルト座標系  $(x_1, x_2, x_3)$  を固定して,  $G$  を  $SO(3; \mathbb{R})$  と同一視し, 又  $G$  の Euler 角を  $(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  とする.  $G$  は  $\Omega$  に等長変換群として作用してゐる.  $\mathcal{F}(\Omega)$  を  $\Omega$  上の関数の全体とする時, 各  $g \in G$ ,  $X \in \mathcal{X}(\Omega)$ ,  $p \in \mathcal{F}(\Omega)$  に対し線型作用素

$$U_g : \mathcal{X}(\Omega) \longrightarrow \mathcal{X}(\Omega), \quad U_g : \mathcal{F}(\Omega) \longrightarrow \mathcal{F}(\Omega)$$



$(U_g X)(x) = g(X(g^{-1}x)), (U_g \varphi)(x) = \varphi(g^{-1}x)$  で定義する。

但し  $g(X(g^{-1}x))$  は  $X(g^{-1}x)$  を基底が  $E_3$  の原点と一致する様に平行移動して  $E_3$  のベクトルと見てこれに  $g$  を作用させるとする。  
 $U_g$  は  $\Omega$  の等長変換  $g$  が  $\Omega$  上のベクトル場を惹き起す可変換である。 $g$  の等長性により  $U_g$  は  $L^2(\Omega), L^2(\Omega)$  に於ける  $G$  のユニタリ表現を与える。

次の定義を設ける。

定義 写像 (linear or nonlinear)  $A: \mathcal{X}(\Omega) \rightarrow \mathcal{X}(\Omega),$

$B: \mathcal{X}(\Omega) \rightarrow \mathcal{F}(\Omega), C: \mathcal{F}(\Omega) \rightarrow \mathcal{X}(\Omega), D: \mathcal{X}(\Omega) \times \mathcal{F}(\Omega) \rightarrow \mathcal{X}(\Omega)$

が  $G$ -invariant であるとは任意の  $g \in G$  に対し

$$\begin{array}{ccccc} \mathcal{X}(\Omega) & \xrightarrow{A} & \mathcal{X}(\Omega) & , & \mathcal{X}(\Omega) & \xrightarrow{B} & \mathcal{F}(\Omega) & , & \mathcal{F}(\Omega) & \xrightarrow{C} & \mathcal{F}(\Omega) \\ \downarrow U_g & & \downarrow U_g & & \downarrow U_g & & \downarrow U_g & & \downarrow U_g & & \downarrow U_g \\ \mathcal{X}(\Omega) & \xrightarrow{A} & \mathcal{X}(\Omega) & & \mathcal{X}(\Omega) & \xrightarrow{B} & \mathcal{F}(\Omega) & & \mathcal{F}(\Omega) & \xrightarrow{C} & \mathcal{F}(\Omega) \\ \\ \mathcal{X}(\Omega) \times \mathcal{F}(\Omega) & \xrightarrow{D} & \mathcal{X}(\Omega) & & & & & & & & \\ \downarrow U_g \times U_g & & \downarrow U_g & & & & & & & & \\ \mathcal{X}(\Omega) \times \mathcal{F}(\Omega) & \xrightarrow{D} & \mathcal{X}(\Omega) & & & & & & & & \end{array}$$

が可換となる事である。

次に Navier-Stokes 方程式の各項を与える写像の  $G$ -invariance を確認しておく。それには各写像の coordinate free 表現を見ればよい。 $\frac{\partial}{\partial t}$  及び  $g$  の等長性より, grad, div 及び  $\Delta \stackrel{\text{Def}}{=} \text{grad} \cdot \text{div} - \text{rot} \cdot \text{rot}$  については殆んど自明である。

又  $\nabla$  についてはそれが  $E_3$  の Riemann 計量  $ds^2 = dx_1^2 + dx_2^2 + dx_3^2$  により決まる Riemannian connection である事により  $\nabla$  は  $G$ -invariant である。又  $X^{(k)} = \alpha \text{grad}(\frac{1}{r})$  の  $G$ -invariance (e.i.  $U_g X^{(k)} = X^{(k)}$  for  $\forall g \in G$ ) により 2 つの線型写像  $X \mapsto \nabla_{X^{(k)}} X$  及び  $X \mapsto \nabla_X X^{(k)}$  は共に  $G$ -invariant である。

故に此の場合の Navier-Stokes 方程式は  $G$ -invariant equation であり,  $G$ -invariant flow  $X^{(k)}$  の事により線型化した方程式は又  $G$ -invariant equation である。その固有値問題を  $G$  のユニタリ表現論の結果を援用して調べるのが本稿の以後の program である。

### [V] $G$ のユニタリ表現

此処では  $G$  のユニタリ表現に因りて以後用いるものは I. M. Gel'fand, R. A. Minlos and Z. Ya. Shapiro; Representations of the rotation and Lorentz groups and their applications, Pergamon Press, 1963 より引用する。

先の様に  $E_3$  にデカルト座標系  $(x_1, x_2, x_3)$  を固定し  $G$  と  $SO(3; \mathbb{R})$  を同一視し。又 Euler 角を  $(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  とすると, Euler 角  $(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  を持つ  $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \in G$  は matrix

$$T_g = T(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \begin{pmatrix} \cos \varphi_1 \cos \varphi_2 - \sin \varphi_1 \cos \theta \sin \varphi_2 & -\cos \varphi_1 \sin \varphi_2 - \sin \varphi_1 \cos \theta \cos \varphi_2 & \sin \varphi_1 \sin \theta \\ \sin \varphi_1 \cos \varphi_2 + \cos \varphi_1 \cos \theta \sin \varphi_2 & -\sin \varphi_1 \sin \varphi_2 + \cos \varphi_1 \cos \theta \cos \varphi_2 & -\cos \varphi_1 \sin \theta \\ \sin \theta \sin \varphi_2 & \sin \theta \cos \varphi_2 & \cos \theta \end{pmatrix}$$

が対応する。又  $T_g^{-1} = T_g^{-1} = T(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1)$  が成り立つ。

$G$  の既約ユニタリ表現は weight  $l$  が  $l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, \dots$  であるもので尽される。

$x_j$  ( $j=1, 2, 3$ ) 軸のまわりの回転に対応する表現の生成元用素を  $A_j$  とし  $H_j = iA_j$ ,  $H_{\pm} = H_1 \pm iH_2$  とし又 weight  $l$  の既約表現の canonical basis を  $\{f_{-l}^l, f_{-l+1}^l, \dots, f_l^l\}$  とすると

$$H_+ f_m^l = \alpha_{m+1}^l f_{m+1}^l, H_- f_m^l = \alpha_m^l f_{m-1}^l, H_3 f_m^l = m f_m^l,$$

但し  $\alpha_m^l = \sqrt{(l+m)(l-m+1)}$ , が成り立つ。

又  $H^2 \equiv H_1^2 + H_2^2 + H_3^2$  とおくと

$$H^2 f_m^l = l(l+1) f_m^l$$

が成り立つ。

ユニタリ表現  $U_g: L^2(S^2) \rightarrow L^2(S^2)$  は integral weight  $l$  の既約表現の直和に分解される。此の時  $(\vartheta, \varphi)$  を 2次元球面  $S^2$  の極座標として,  $H_{\pm}, H_3, H^2$  は

$$H_{\pm} = e^{\pm i\varphi} \left( \pm \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi} \right), H_3 = i \frac{\partial}{\partial \varphi}$$

$$-H^2 = \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left( \sin \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2}$$

で与えられる。

又 weight  $l$  の既約表現の canonical basis (は <sup>integral</sup> 球関数  $\{Y_l^m(\vartheta, \varphi); m = -l, -l+1, \dots, l-1, l\}$  で与えられる。

$$Y_l^m(\vartheta, \varphi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-im\varphi} P_l^m(\cos \vartheta),$$

$$P_l^m(\mu) = \sqrt{\frac{(l+m)!}{(l-m)!}} \sqrt{\frac{2l+1}{2}} \frac{1}{2^l l!} (1-\mu^2)^{-\frac{m}{2}} \frac{d^{l-m}}{d\mu^{l-m}} (1-\mu^2)^l$$

である。

weight  $l$  の既約表現の canonical basis を成す  $U_g$   
 $(g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2))$  の matrix を  $T = T(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \begin{bmatrix} T_{-l,-l}^l & \cdots & T_{-l,l}^l \\ T_{-l+1,-l}^l & & T_{-l+1,l}^l \\ \vdots & & \vdots \\ T_{l,-l}^l & \cdots & T_{l,l}^l \end{bmatrix}$

とすると generalized spherical function  $T_{mn}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  は

$$\begin{cases} T_{mn}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{-im\varphi_1} P_{mn}^l(\cos\theta) e^{-in\varphi_2} \\ P_{mn}^l(\mu) = \frac{(-1)^{l-m} i^{n-m}}{2^l (l-m)!} \sqrt{\frac{(l-m)!(l+n)!}{(l+m)!(l-n)!}} (1-\mu)^{-\frac{n-m}{2}} (1+\mu)^{\frac{n+m}{2}} \times \end{cases}$$

$$\times \frac{d^{l-n}}{d\mu^{l-n}} \left[ (1-\mu)^{l-m} (1+\mu)^{l+m} \right]$$

と与えられる。

表現のユニタリ性より  $\overline{T_{mn}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)} = T_{nm}^l(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1)$   
 が成り立つ。又  $Y_l^m$  と  $T_{mn}^l$  の間には

$$Y_l^n(\vartheta, \varphi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \sqrt{\frac{2l+1}{2}} T_{0,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

の関係式が成り立つ。

更に  $G$  上の関数  $\varphi$  に対し  $(V_{g_0} \varphi)(g) = \varphi(gg_0)$  とおくと  
 $V_{g_0}$  は  $L^2(G)$  ( $G$  上の Haar measure  $\frac{1}{8\pi^2} \sin\theta d\varphi_1 d\theta d\varphi_2$  に対する  
 $L_2$ -space) に於ける  $G$  のユニタリ表現を与えらるが、此の表  
 現は  $(2l+1)$  個の weight  $l$  の既約表現の直和の直和に分解する。

$l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, \dots$ 。夫々の canonical basis は (normalization の後に)。

$\{Y_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2) : -l \leq n \leq l\}$  で与えられる。normalization constant は  $\frac{\sqrt{2l+1}}{4\pi}$  であり  $m, n$  に依存しない。この事は後に利用する。表現  $V_g$  に対して

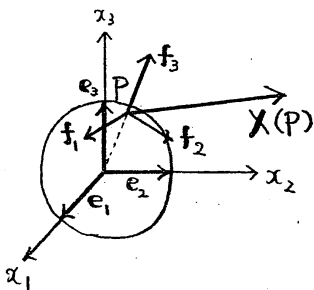
$$\begin{cases} H_{\pm} = e^{\mp i\varphi_2} \left( \pm \cot\theta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \mp \frac{1}{\sin\theta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) \\ H_3 = i \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \\ -H^2 = \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot\theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2\theta} \left( \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1^2} - 2 \cos\theta \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1 \partial \varphi_2} + \frac{\partial^2}{\partial \varphi_2^2} \right) \end{cases}$$

である。

### [VI] $\mathcal{X}(E_3)|_{S^2}$ の分解

此の [VI] では  $E_3$  の (複素) ベクトル場を単位球面に制限して得られる (ベクトル値) 関数で  $S^2$  で二乗可積分なもの全体のなすヒルベルト空間  $L^2(S^2)$  の分解を行う。  $\varphi \in L^2(S^2)$ ,  $g \in G$  に対して  $(U_g \varphi)(x) = \varphi(g^{-1}x)$  は  $G$  の  $L^2(S^2)$  に於けるユニタリ表現を与える。

我々  $S^2$  上の点を起点とする  $(x_1, x_2, x_3)$  に関する右手系の正規直交基底  $\{f_1, f_2, f_3\}$  で  $f_3$  が  $S$  と直交するもの全体のなす。



$\{f_1, f_2, f_3\}$  を起点  $P$  が  $(x_1, x_2, x_3)$  座標の原点と一致する様に平行移動すると我々は  $E_3$  の右手系正規直交基底の全体と同一視出来る。此の同一視の下で

$g \in G$  に対し  $f_i = ge_i$  とおくと  $\mathcal{F}$  は  $G$  と同一視出来る。

(此の  $G \longrightarrow \mathcal{F}$  は bijective).  $\times \{f_1, f_2, f_3\}$  の起典  $P$  と  $f_3$  と同一視する。  $X \in L^2(S^2)$  に対しいる  $G$  上の関数  $X_i(g)$  と

$X_i(g) = ge_3$  と起典とするベクトル  $X(ge_3)$  の基底  $\{ge_1, ge_2, ge_3\}$  に関する  $i$  成分

で定義する。表現  $U_{g_0}$  が  $X_i$  に惹き起す変換を調べる。

$U_{g_0} X$  に対応する  $X_i$  と  $\tilde{X}_i$  とすると

$$\begin{aligned} \tilde{X}_i(g) &= i\text{-th component of } U_{g_0} X \text{ with respect to the basis } \{ge_1, ge_2, ge_3\}. \\ &= \text{ " " of } g_0(X(g_0^{-1}ge_3)) \text{ " " " " " "} \\ &= \text{ " " of } X(g_0^{-1}ge_3) \text{ " " " } \{g_0^{-1}ge_1, g_0^{-1}ge_2, g_0^{-1}ge_3\} \\ &= X_i(g_0^{-1}g). \end{aligned}$$

故に  $\tilde{X}_i(g) = X_i(g_0^{-1}g) \equiv (U_{g_0} X_i)(g)$  となる。

此の表現  $U_g$  と先の [V] で定義した表現  $V_g$  とは互にユニタリ-同値である。即ちユニタリ-変換  $U: L^2(G) \rightarrow L^2(G)$  なる  $F \in L^2(G)$  に対しいる  $(UF)(g) = F(g^{-1})$  で定義すると 任意の  $g \in G$  に対しいる

$$\begin{array}{ccc} L^2(G) & \xrightarrow{U_g} & L^2(G) \\ \downarrow U & & \downarrow U \\ L^2(G) & \xrightarrow{V_g} & L^2(G) \end{array}$$

は可換である。各  $X_i(g)$  は  $T_{m,n}^l(\varphi, \theta, \psi)$ ,  $l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, \dots, -l \leq m, n \leq l$  で展開出来る訳であるが,  $X_i(g)$  の代りに  $\hat{X}_i(g) \equiv X_i(g^{-1})$  と

考えれば  $G$  の作用に因りて compatible な展開が求まる。

$\hat{X}_1(g)$  を展開するのには全 2 の  $T_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  が必要ではない。その為  $P = g e_3$ ,  $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  の Euler 角と  $P$  の極座標  $(\vartheta, \varphi)$  の関係を調べる。

$$P = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2) e_3 \text{ の } \{e_1, e_2, e_3\} \text{ に関する座標} = T(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \text{ の } \begin{matrix} \text{成分} \\ \text{である} \end{matrix}$$

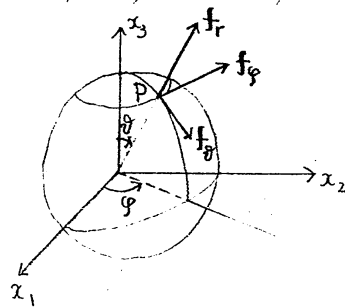
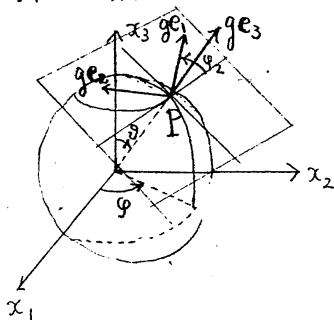
$$= \begin{pmatrix} \sin \varphi_1 \sin \theta \\ -\cos \varphi_1 \sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sin \vartheta \cos \varphi \\ \sin \vartheta \sin \varphi \\ \cos \vartheta \end{pmatrix}$$

より  $\varphi_1 = \frac{\pi}{2} + \varphi$ ,  $\theta = \vartheta$  を得る。従って  $f_r, f_\vartheta, f_\varphi \in E_3$  のハクトル場で各点  $P = (\vartheta, \varphi)$  (spherical coordinate) で夫々  $r, \vartheta, \varphi$ -方向の長さが 1 のハクトル場とすると、 $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$  ( $\theta = \vartheta, \varphi_1 = \frac{\pi}{2} + \varphi_2$ ) とし

$$(g e_1, g e_2, g e_3) = (f_\vartheta, f_\varphi, f_r) \begin{pmatrix} \cos(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & -\sin(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & 0 \\ \sin(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & \cos(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

$$= (f_\vartheta, f_\varphi, f_r) \begin{pmatrix} -\sin \varphi_2 & -\cos \varphi_2 & 0 \\ \cos \varphi_2 & -\sin \varphi_2 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

が成り立つ。何故なら  $(\exists g(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = g_1 \circ g(\varphi_1, \theta, 0))$  (但し  $g_1$  は  $g e_3 = f_r$  を軸とする角度  $\varphi_2$  の回転とする) が成り立つ。



従って  $X \in L^2(S^2)$  に対して  $X = \sum_{i=1}^3 X_i g e_i = X_\theta f_\theta + X_\varphi f_\varphi + X_r f_r$

とおく。但し  $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ ,  $\varphi_1 = \frac{\pi}{2} + \varphi$ ,  $\theta = \vartheta$

$$(VI-1) \begin{cases} X_1 = -\sin \varphi_2 X_\theta + \cos \varphi_2 X_\varphi \\ X_2 = -\cos \varphi_2 X_\theta - \sin \varphi_2 X_\varphi \\ X_3 = X_r \end{cases}$$

相加し立つ。故に  $X_\pm(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_1(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \pm i X_2(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$

とおく

$$(VI-2) \begin{cases} X_+(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{-i\varphi_2} (-i X_\theta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi)) \\ \quad = e^{-i\varphi_2} (-i X_\theta(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2}) + X_\varphi(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2})) \\ X_-(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{i\varphi_2} (i X_\theta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi)) \\ \quad = e^{i\varphi_2} (i X_\theta(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2}) + X_\varphi(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2})) \\ X_3(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_r(\vartheta, \varphi) \\ \quad = X_r(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2}) \end{cases}$$

加得らる。  $\widehat{X}_\pm(g) = X_\pm(g^{-1})$  に対して (2)

$$(VI-3) \begin{cases} \widehat{X}_+(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_+(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1) = -e^{i\varphi_1} (-i X_\theta(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2) + X_\varphi(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2)) \\ \widehat{X}_-(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_-(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1) = -e^{-i\varphi_1} (i X_\theta(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2) + X_\varphi(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2)) \\ \widehat{X}_3(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_3(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1) = X_r(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2) \end{cases}$$

加得らる。此処で  $T_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{-im\varphi_1} P_{mn}^l(\cos \theta) e^{-in\varphi_2}$

を考慮すれば、次式の形の展開が出来る事判る。

$$(VI-4) \begin{cases} \widehat{X}_\pm(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \sum_{\ell=1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} a_{\pm,n}^{\ell} T_{\mp 1,n}^{\ell}(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \\ \widehat{X}_3(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \sum_{\ell=0,1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} a_{3,n}^{\ell} T_{0,n}^{\ell}(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \end{cases}$$



(VI-3), (VI-4) で  $\vartheta = \theta, \varphi = \frac{\pi}{2} - \vartheta_2$  とおくと

$$(VI-5) \left\{ \begin{aligned} -iX_\vartheta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi) &= -e^{-i\varphi_1} \sum_{\ell} \sum_n a_{+,n}^{\ell} T_{-1,n}^{\ell}(\varphi_1, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ &= \sum_{\ell=1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} b_{-,n}^{\ell} T_{-1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ iX_\vartheta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi) &= -e^{i\varphi_1} \sum_{\ell} \sum_n a_{-,n}^{\ell} T_{+1,n}^{\ell}(\varphi_1, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ &= \sum_{\ell=1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} b_{+,n}^{\ell} T_{+1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ X_r(\vartheta, \varphi) &= \sum_{\ell=0,1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} b_{r,n}^{\ell} Y_{\ell}^n(\vartheta, \varphi). \end{aligned} \right.$$

の形に展開出来ることが分る。但し最後の式で

$$Y_{\ell}^n(\vartheta, \varphi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \sqrt{\frac{\ell+1}{2}} T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \text{ を用いる。}$$

## [VII] 線型化された Navier-Stokes 方程式の固有値問題

### § VII-1 線型化された Navier-Stokes 方程式

対称ポテンシャル流  $X^{(\alpha)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{-1}{r})$  の安定性を調べる事は先に述べた様に、 $X^{(k)}$  のまわりで線型化された定常 Navier-Stokes 方程式の固有値問題

$$-\nu \Delta X - \rho [\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)}] = \lambda X$$

の研究に帰着される。これは  $L^2(\Omega)$  の分解に関する補題による次の境界値問題と同等である。

$$(BVP) \left\{ \begin{aligned} \nu \Delta X - \nabla_{X^{(k)}} X - \nabla_X X^{(k)} + \operatorname{grad} p &= \lambda X, \operatorname{div} X = 0, X|_{\partial\Omega} = 0 \\ \text{for some scalar function } p &= p(x). \end{aligned} \right.$$

### § VIII-2. 種々の公式

[VI]の結果から今と同様に上の境界値問題(極座標  $(r, \vartheta, \varphi)$ ) を用いた方が研究し易い。その為  $(r, \vartheta, \varphi)$  を用いた種々の公式を列挙しておく。

$X \in \mathcal{X}(\Omega)$  に対し  $X = X_r f_r + X_\vartheta f_\vartheta + X_\varphi f_\varphi$  とおく。

このとき

$$\begin{aligned}
 \Delta X &= \left\{ \Delta X_r - \frac{2}{r^2} X_r - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta X_\vartheta) - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} \right\} f_r \\
 &+ \left\{ \Delta X_\vartheta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_\vartheta + \frac{2}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial \vartheta} - \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} \right\} f_\vartheta \\
 &+ \left\{ \Delta X_\varphi - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_\varphi + \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_r}{\partial \varphi} + \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_\vartheta}{\partial \varphi} \right\} f_\varphi \quad \text{である。}
 \end{aligned}$$

これに  $A_r(X) f_r + A_\vartheta(X) f_\vartheta + A_\varphi(X) f_\varphi$  とおく。

但し、関数  $k$  に対し  $(\Delta k = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 \frac{\partial k}{\partial r}) + \frac{1}{r^2} \left\{ \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta \frac{\partial k}{\partial \vartheta}) + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2 k}{\partial \varphi^2} \right\})$  である。

又一般に  $X, Y \in \mathcal{X}(\Omega)$ ,  $X = X_r f_r + X_\vartheta f_\vartheta + X_\varphi f_\varphi$ ,  $Y = Y_r f_r + Y_\vartheta f_\vartheta + Y_\varphi f_\varphi$

に対し

$$\begin{aligned}
 \text{(VII-2)} \quad \nabla_X Y &= \left( X(Y_r) - \frac{X_\vartheta Y_\vartheta}{r} - \frac{X_\varphi Y_\varphi}{r} \right) f_r \\
 &+ \left( X(Y_\vartheta) + \frac{X_\vartheta Y_r}{r} - \frac{X_\varphi Y_\varphi \cot \vartheta}{r} \right) f_\vartheta \\
 &+ \left( X(Y_\varphi) + \frac{X_\varphi Y_r}{r} + \frac{X_\vartheta Y_\vartheta \cot \vartheta}{r} \right) f_\varphi
 \end{aligned}$$

である。但し  $X(Y_r)$  はベクトル場  $X$  を一次の斉次偏微分

作用素と見做して、即ち  $X = X_r \frac{\partial}{\partial r} + \frac{X_\vartheta}{r} \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{X_\varphi}{r \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi}$  として

関数  $f_r, \dots$  に作用させ  $\Delta$  の  $\alpha$  である。特に我々の  $X^{(k)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{1}{r})$

に対しては

$$(III-3) \begin{cases} \nabla_{X^{(k)}} X = \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial r} f_r + \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\theta}{\partial r} f_\theta + \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\varphi}{\partial r} f_\varphi \\ \nabla_X X^{(k)} = -\frac{2\alpha}{r^3} X_r f_r + \frac{\alpha}{r^3} X_\theta f_\theta + \frac{\alpha}{r^3} X_\varphi f_\varphi \end{cases}$$

である。最後に

$$(VII-4) \quad \operatorname{grad} p = \frac{\partial p}{\partial r} f_r + \frac{1}{r} \frac{\partial p}{\partial \theta} f_\theta + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} f_\varphi$$

$$(VII-5) \quad \operatorname{div} X = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta X_\theta) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi}$$

である。

### § VII-3 変数分離

取り扱うべき方程式は次の連立方程式である。

$$X \in \mathcal{X}(\Omega), \quad X = X_r f_r + X_\theta f_\theta + X_\varphi f_\varphi \quad (1)$$

$$(E_r) \quad \mathcal{A}_r(X) - (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_r + \operatorname{grad} p = \lambda X_r$$

$$(E_\theta) \quad \mathcal{A}_\theta(X) - (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_\theta + \frac{1}{r} \frac{\partial p}{\partial \theta} = \lambda X_\theta$$

$$(E_\varphi) \quad \mathcal{A}_\varphi(X) - (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_\varphi + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} = \lambda X_\varphi$$

$$(E_\sigma) \quad \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta X_\theta) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} = 0$$

$$(E_\beta) \quad X_r|_{\partial\Omega} = X_\theta|_{\partial\Omega} = X_\varphi|_{\partial\Omega} = 0.$$

[IV]の結果は

$$X_{\pm} = X_{\varphi} \pm iX_{\vartheta}$$

と置くことを示唆している。故にこのようにする。これに対応して

$$\Pi_{\pm} = \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial P}{\partial \varphi} \pm i \frac{1}{r} \frac{\partial P}{\partial \vartheta}, \quad \Pi_r = \frac{\partial P}{\partial r}$$

とおく。

以下、方程式系  $(E_r) - (E_{\sigma})$  を  $X_{\pm}, X_r, \Pi_{\pm}, \Pi_r$  を用いた方程式系に書き換える。

先ず  $(E_{\varphi}) \pm i(E_{\vartheta})$  を計算する。

$$\begin{aligned} & \mathcal{A}_{\varphi}(X) \pm i \mathcal{A}_{\vartheta}(X) \\ &= \left\{ \Delta X_{\varphi} - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_{\varphi} + \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_r}{\partial \varphi} + \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_{\vartheta}}{\partial \varphi} \right\} \\ & \pm i \left\{ \Delta X_{\vartheta} - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_{\vartheta} + \frac{2}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial \vartheta} - \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_{\varphi}}{\partial \varphi} \right\} \end{aligned}$$

$$= \Delta X_{\pm} - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_{\pm} \mp i \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_{\pm}}{\partial \varphi} + \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_r}{\partial \varphi} \pm i \frac{2}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial \vartheta}$$

故に

$$\mathcal{A}_{\varphi}(X) \pm i \mathcal{A}_{\vartheta}(X) = \left( \Delta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_{\pm} + \frac{2}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) X_r$$

$$\begin{aligned} \mathcal{A}_r(X) &= \Delta X_r - \frac{2}{r^2} X_r - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta X_{\vartheta}) - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_{\varphi}}{\partial \varphi} \\ &= \left( \Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left( \sin \vartheta \cdot \frac{X_+ - X_-}{2i} \right) - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \frac{X_+ + X_-}{2} \\ &= \left( \Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r + i \frac{1}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left\{ \sin \vartheta (X_+ - X_-) \right\} - \frac{1}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} (X_+ + X_-) \\ &= \left( \Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \vartheta} - i \cot \vartheta \right) X_+ \\ & \quad - \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \right) X_- \end{aligned}$$

故に

$$\begin{aligned} \Delta_r(\mathbf{X}) = & (\Delta - \frac{2}{r^2})X_r - \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\varphi} - i \frac{\partial}{\partial\vartheta} - i \cot\vartheta \right) X_+ \\ & - \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\varphi} + i \frac{\partial}{\partial\vartheta} + i \cot\vartheta \right) X_- \end{aligned}$$

— 2 —

$$\begin{aligned} & (\nabla_{\mathbf{X}^{(k)}} \mathbf{X} + \nabla_{\mathbf{X}} \mathbf{X}^{(k)})_{\varphi} \pm i (\nabla_{\mathbf{X}^{(k)}} \mathbf{X} + \nabla_{\mathbf{X}} \mathbf{X}^{(k)})_{\vartheta} \\ & = \left( \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_{\varphi}}{\partial r} + \frac{\alpha}{r^3} X_{\varphi} \right) \pm i \left( \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_{\vartheta}}{\partial r} + \frac{\alpha}{r^3} X_{\vartheta} \right) \\ & = \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_{\pm}}{\partial r} + \frac{\alpha}{r^3} X_{\pm} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & (\nabla_{\mathbf{X}^{(k)}} \mathbf{X} + \nabla_{\mathbf{X}} \mathbf{X}^{(k)})_{\varphi} \pm i (\nabla_{\mathbf{X}^{(k)}} \mathbf{X} + \nabla_{\mathbf{X}} \mathbf{X}^{(k)})_{\vartheta} = \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^3} \right) X_{\pm} \\ & (\nabla_{\mathbf{X}^{(k)}} \mathbf{X} + \nabla_{\mathbf{X}} \mathbf{X}^{(k)})_r = \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{2}{r^3} \right) X_r \end{aligned}$$

最後に

$$\begin{aligned} (E_0) \quad 0 = \operatorname{div} \mathbf{X} & = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\vartheta} (\sin\vartheta X_{\vartheta}) + \frac{1}{r \sin\vartheta} \frac{\partial X_{\varphi}}{\partial\varphi} \\ & = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\vartheta} \left( \sin\vartheta \frac{X_+ - X_-}{2i} \right) + \frac{1}{r \sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\varphi} \frac{X_+ + X_-}{2} \\ & = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) - \frac{i}{2r} \left( \frac{\partial}{\partial\vartheta} + \cot\vartheta + i \frac{1}{\sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\varphi} \right) X_+ \\ & \quad + \frac{i}{2r} \left( \frac{\partial}{\partial\vartheta} + \cot\vartheta - i \frac{1}{\sin\vartheta} \frac{\partial}{\partial\varphi} \right) X_- \end{aligned}$$

故に方程式系 (E<sub>r</sub>) — (E<sub>φ</sub>) は次の方程式系と同値になる。

$$(E_{\pm}) \left\{ \left( \Delta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_{\pm} + \frac{2}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) X_r \right\} \\ - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^3} \right) X_{\pm} + \Pi_{\pm} = \lambda X_{\pm}$$

$$(E_r) \left\{ \left( \Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \vartheta} - i \cot \vartheta \right) X_+ \right. \\ \left. - \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \right) X_- \right\} \\ - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{2}{r^3} \right) X_r + \Pi_r = \lambda X_r$$

$$(E_{\vartheta}) \quad \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) - \frac{i}{2r} \left( \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta + i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_+ \\ + \frac{i}{2r} \left( \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta - i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_- = 0$$

$$(E_{\rho}) \quad X_{\pm} \Big|_{\partial \Omega} = X_r \Big|_{\partial \Omega} = 0$$

⇒ 2 [VI] の結果より  $X_{\pm}, X_r$  は

$$X_{\pm}(r, \vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=1}^{\infty} f_{\pm}^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} T_{\pm, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$X_r(r, \vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=0}^{\infty} f_0^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

の形に展開出来る。  $p = p(r, \vartheta, \varphi)$  は

$$p(r, \vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=0}^{\infty} g^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} Y_{\ell}^n(\vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=0}^{\infty} p^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

の形に展開出来る。

$$\begin{cases} X_{\pm}(r, \vartheta, \varphi) = f_{\pm}^l(r) T_{\pm 1, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ X_r(r, \vartheta, \varphi) = f_r^l(r) T_{0, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ \rho(r, \vartheta, \varphi) = \rho^l(r) T_{0, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \end{cases}$$

とおいて  $(E_{\pm}), (E_r), (E_{\theta})$  に代入して  $T_{m, n}^l$  の項を消去し  $\bar{L}$  の関数であるが、この時次の事に注意する。即ち  $\{T_{m, n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2); -l \leq n \leq l\}$  は  $L^2(G)$  に於ける  $G$  のユニタリ表現  $(V_g f)(g) = f(gg_0)$  の weight  $l$  の既約成分の表現空間の基底をなしてあり、 $l$  のみに依存する normalization constant を乗じてその canonical basis となる。故に  $H_{\pm}, H_3, H^2$  等を作用させると  $T_{m, n}^l$  は canonical basis と同じ関係式を満足す。この事を用いて問題の reduction に必要な recurrence formula を導く。

$G$  上のユニタリ表現  $(V_g f)(g) = f(gg_0)$  に対しては

$$\begin{cases} H_{\pm} = e^{\mp i\varphi_2} \left( \pm \cot \theta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \mp \frac{1}{\rho \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) \\ H_3 = i \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \\ -H^2 = \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\rho \sin^2 \theta} \left( \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1^2} - 2 \cos \theta \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1 \partial \varphi_2} + \frac{\partial^2}{\partial \varphi_2^2} \right) \end{cases}$$

である。又  $\overline{T_{m, n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)} = T_{n, m}^l(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1)$  である。

よって

$$\begin{aligned} & \left( \frac{1}{\rho \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \overline{\left( \frac{1}{\rho \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{n, 0}^l(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\ & = \overline{\left( \frac{1}{\rho \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{n, 0}^l(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, 0)} \\ & = \mp e^{\mp i\pi} \overline{\left( e^{\mp i\pi} \left( \pm \cot \theta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \mp \frac{1}{\rho \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{n, 0}^l \right) (\varphi + \frac{\pi}{2}, \vartheta, \pi)} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \pm (H_{\pm} T_{n,0}^{\ell})(\varphi + \frac{\pi}{2}, \vartheta, \pi) = \pm \alpha_1^{\ell} T_{n,\pm 1}^{\ell}(\varphi + \frac{\pi}{2}, \vartheta, \pi) \\
&= \pm \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).
\end{aligned}$$

故有

$$\left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \pm \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).$$

次有

$$\begin{aligned}
&\left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) \overline{T_{n,\pm 1}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\
&= \overline{\left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{n,\pm 1}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\
&= \pm \left( \left( \mp \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \pm \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i' \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{\pm 1,n}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) + \left( \cot \vartheta \frac{\partial T_{n,\pm 1}^{\ell}}{\partial \varphi_2} \right)(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \right) \\
&= \pm \left\{ e^{\mp i' \varphi_2} \left[ e^{\pm i' \varphi_2} \left( \mp \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \pm \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i' \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{n,\pm 1}^{\ell} \right] \right\} (\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&\quad + \cot \vartheta \frac{\partial T_{n,\pm 1}^{\ell}}{\partial \varphi_2} (\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&= \pm e^{\pm i' \pi} \cdot \overline{(H_{\mp} T_{n,\pm 1}^{\ell})(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} + (-i') \cot \vartheta \overline{(H_3 T_{n,\pm 1}^{\ell})(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\
&= \mp \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{n,0}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) + i' (\pm) \cot \vartheta T_{n,\pm 1}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&= \mp \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \pm i' \cot \vartheta T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).
\end{aligned}$$

故有

$$\left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \mp i' \cot \vartheta \right) T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \mp \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$



$$\text{故 } -H^2 T_{m,n}^l = -l(l+1) T_{m,n}^l \quad \text{且}$$

$$\begin{aligned} -l(l+1) T_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2) &= \left\{ \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \left( \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1^2} - 2 \cos \theta \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1 \partial \varphi_2} + \frac{\partial^2}{\partial \varphi_2^2} \right) \right\} T_{m,n}^l \\ &= \left( \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{m,n}^l + \frac{1}{\sin^2 \theta} \left( -m^2 T_{m,n}^l + 2im \cos \theta \frac{\partial T_{m,n}^l}{\partial \varphi_2} + \frac{\partial^2 T_{m,n}^l}{\partial \varphi_2^2} \right) \end{aligned}$$

$$\therefore -l(l+1) T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \left( \frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{m,n}^l$$

$$+ \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \left\{ -m^2 T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) - 2im \cos \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi} T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) + \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \right\}$$

故取  $m = +1, -1, 0$  时

$$\left( \frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} - i \frac{2 \cos \vartheta}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \right) T_{+1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$= -l(l+1) T_{+1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\left( \frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} + i \frac{2 \cos \vartheta}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \right) T_{-1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$= -l(l+1) T_{-1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\left( \frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right) T_{0,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$= -l(l+1) T_{0,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\text{次に } X_{\pm}(r, \vartheta, \varphi) = f_{\pm}^l(r) T_{\pm 1, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$X_r(r, \vartheta, \varphi) = f_0^l(r) T_{0, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$p(r, \vartheta, \varphi) = p^l(r) T_{0, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$\varepsilon(\varepsilon_{\pm}), (\varepsilon_r), (\varepsilon_0)$  に対して  $\lambda$  をとる。

先ず " $\varepsilon_{\pm}$  のある項,  $\varepsilon_r$ "

$$\begin{aligned} \Pi_{\pm} &= \Pi_{\varphi} \pm i \Pi_{\vartheta} = \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} \pm i \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \\ &= p^l(r) \frac{1}{r} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ &= p^l(r) \frac{1}{r} (\pm 1) \sqrt{l(l+1)} T_{\pm 1, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi). \end{aligned}$$

即ち

$$\Pi_{\pm} = \pm p^l(r) \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r} T_{\pm 1, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).$$

次に  $\varepsilon_0$  に対して  $X_{\pm}, X_r, p \in (\varepsilon_{\pm})$  に対して  $\lambda$  をとる。

$$\lambda f_{\pm}^l T_{\pm 1, n}^l = \lambda X_{\pm}$$

$$= \nu \left\{ \left( \Delta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) f_{\pm}^l T_{\pm 1, n}^l + \frac{2}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) f_0^l T_{0, n}^l \right\}$$

$$- \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^3} \right) f_{\pm}^l T_{\pm 1, n}^l + \Pi_{\pm}$$

$$= \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_{\pm}^l}{dr} \right) T_{\pm 1, n}^l + f_{\pm}^l \frac{1}{r^2} \left( \frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \right) T_{\pm 1, n}^l \right.$$

$$\left. + f_0^l \frac{2}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0, n}^l \right\} - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{df_{\pm}^l}{dr} + \frac{1}{r^3} f_{\pm}^l \right) T_{\pm 1, n}^l$$

$$\pm \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r} p^l T_{\pm 1, n}^l$$

$$= \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_{\pm}^l}{dr} \right) T_{\pm 1, n}^l - \frac{l(l+1)}{r^2} f_{\pm}^l T_{\pm 1, n}^l \pm \frac{2\sqrt{l(l+1)}}{r^2} f_0^l T_{\pm 1, n}^l \right\}$$

$$- \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{df_{\pm}^l}{dr} + \frac{1}{r^3} f_{\pm}^l \right) T_{\pm 1, n}^l \pm \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r} p^l T_{\pm 1, n}^l$$

故に  $f_{\pm}^l, f_0^l, p^l$  の満たすべき方程式は

$$(D_{\pm}) \quad \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_{\pm}^l}{dr} \right) - \frac{l(l+1)}{r^2} f_{\pm}^l \pm \frac{2\sqrt{l(l+1)}}{r^2} f_0^l$$

$$- \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} + \frac{1}{r^3} \right) f_{\pm}^l \pm \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r} p^l = \lambda f_{\pm}^l$$

次に  $(E_r)$  から (2) を

$$\lambda f_0^l T_{0, n}^l = \lambda X_r$$

$$= \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} \left( r^2 \frac{\partial X_r}{\partial r} \right) + \frac{1}{r^2} \left( \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right) X_r \right.$$

$$- \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \theta} - i \cot \theta \right) X_+$$

$$- \left. \frac{1}{r^2} \left( \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \theta} + i \cot \theta \right) X_- \right\}$$

$$- \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{2}{r^3} \right) X_r + \Pi_r$$

$$= \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_0^l}{dr} \right) T_{0, n}^l + \frac{f_0^l}{r^2} (-l(l+1)) T_{0, n}^l \right.$$

$$+ \frac{f_+^l}{r^2} \sqrt{l(l+1)} T_{0, n}^l - \frac{f_-^l}{r^2} \sqrt{l(l+1)} T_{0, n}^l$$

$$\left. - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{df_0^l}{dr} - \frac{2}{r^3} f_0^l \right) T_{0, n}^l + \frac{df_0^l}{dr} T_{0, n}^l \right.$$

故に

$$(D_r) \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_0^l}{dr} \right) - \frac{l(l+1)}{r^2} f_0^l + \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r^2} (f_+^l - f_-^l) \right\} \\ - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} - \frac{2}{r^3} \right) f_0^l + \frac{dp^l}{dr} = \lambda f_0^l$$

(E<sub>r</sub>) より

$$0 = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 f_0^l T_{0,n}^l) - i \frac{f_+^l}{2r} \left( \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta + i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) T_{+1,n}^l \\ + i \frac{f_-^l}{2r} \left( \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta - i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) T_{-1,n}^l \\ = \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_0^l}{dr} \right) T_{0,n}^l - \frac{f_+^l}{2r} \sqrt{l(l+1)} T_{0,n}^l + \frac{f_-^l}{2r} \sqrt{l(l+1)} T_{0,n}^l$$

故に

$$(D_0) \quad \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} (r^2 f_0^l) - \frac{\sqrt{l(l+1)}}{2r} (f_+^l - f_-^l) = 0$$

### [VII] 固有値問題

次に常微分方程式系 (D<sub>±</sub>), (D<sub>r</sub>), (D<sub>0</sub>) に対する境界値問題の固有値問題を調べる。系 (2) f<sub>±</sub><sup>l</sup> → f<sub>±</sub>, f<sub>0</sub><sup>l</sup> → f<sub>0</sub>, p<sup>l</sup> → p と略記し。

$$(D_{\pm}) \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_{\pm}}{dr} \right) - \frac{l(l+1)}{r^2} f_{\pm} \pm \frac{2\sqrt{l(l+1)}}{r^2} f_0 \right\} \\ - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} + \frac{1}{r^3} \right) f_{\pm} \pm \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r} p = \lambda f_{\pm}$$

$$(D_r) \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df_0}{dr} \right) - \frac{l(l+1)}{r^2} f_0 + \frac{\sqrt{l(l+1)}}{r^2} (f_+ - f_-) \right\} \\ - \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} - \frac{2}{r^3} \right) f_0 + \frac{dp}{dr} = \lambda f_0$$

$$(D_0) \quad \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} (r^2 f_0) - \frac{\sqrt{l(l+1)}}{2r} (f_+ - f_-) = 0$$

$$(D_p) \quad f_{\pm}(r_i) = f_0(r_i) = 0, \quad (i=1, 2).$$

$$(l=1, 2, \dots) \quad -28-$$

である。  $(D_\rho)$  は  $f_+ - f_-$  を各  $(D_\pm), (D_r)$  に代  $\lambda$  (3) を消去すれば  $f$  に対する四階の常微分作用素に対する境界値問題を解るが、非常に複雑な為筆者は未だこの問題を解く事に成功していない。 此処では部分的な結果を報告する。

$f_0 \equiv 0$  と仮定するのは可。  $(D_0)$  は  $f_+ - f_- = 0$  と解る。  $(D_r)$  は  $f = c$  (constant) と解るが、  $f = f_+ = f_-$  と  $(D_\pm)$  は

$$\pm \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} f = \lambda f - \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left( r^2 \frac{df}{dr} \right) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f \right\} + \alpha \left( \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} + \frac{1}{r^3} \right) f$$

従って  $f \equiv 0$  と解る。 従って結局  $(\nu=1$  と可)

$$(BVP)_2 \begin{cases} \frac{d^2 f}{dr^2} + \left( \frac{2}{r} - \frac{\alpha}{r^2} \right) \frac{df}{dr} - \left( \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} + \frac{\alpha}{r^3} \right) f = \lambda f \\ f(r_i) = 0, \quad i=1, 2 \end{cases}$$

此処で  $f'$  の項を消去する為  $f(r) = a_\alpha(r) g(r)$ ,  $a_\alpha(r) = \frac{1}{r} e^{-\frac{\alpha}{2r}}$  とおくと

$$(BVP)_2 \text{ は } \begin{cases} g''(r) + Q_\alpha(r) g(r) = \lambda g(r) \\ g(r_i) = 0, \quad i=1, 2 \end{cases}$$

となる。 但し  $Q_\alpha(r) = \frac{1}{a_\alpha(r)} \left\{ a_\alpha''(r) + \left( \frac{2}{r} - \frac{\alpha}{r^2} \right) a_\alpha'(r) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} - \frac{\alpha}{r^3} \right\}$  とする。

この固有値問題の最大固有値  $\lambda_{\max}$  は

$$\lambda_{\max} = \sup \left\{ - \int_{r_1}^{r_2} |g'(r)|^2 dr + \int_{r_1}^{r_2} Q_\alpha(r) |g(r)|^2 dr \right\}$$

但し,  $\sup$  は  $g \in C^2([r_1, r_2])$ ,  $g(r_i) = 0$ ,  $i=1, 2$ .  
 $\int_{r_1}^{r_2} |g(r)|^2 dr = 1$  とする  $g$  を  $k=2$  とする.

更に.

$$\lambda_{\max} \geq \sup \left( - \int_{r_1}^{r_2} |g'(r)|^2 dr \right) + \min_{r_1 \leq r \leq r_2} Q_\alpha(r) \int_{r_1}^{r_2} |g(r)|^2 dr$$

$$= \sup \left( - \int_{r_1}^{r_2} |g'(r)|^2 dr \right) + \min_{r_1 \leq r \leq r_2} Q_\alpha(r)$$

$$= - \left( \frac{\pi}{r_2 - r_1} \right)^2 + \min_{r_1 \leq r \leq r_2} Q_\alpha(r)$$

$$\therefore \lambda_{\max} \geq - \left( \frac{\pi}{r_2 - r_1} \right)^2 + \min_{r_2 \leq r \leq r_2} \left\{ \left( \frac{1}{4r^5} + \frac{1}{2r^4} \right) \alpha^2 - \left( \frac{1}{2r^4} + \frac{9}{2r^3} \right) \alpha + \frac{4 - l(l+1)}{r^2} \right\}$$

となる。  $Q_\alpha(r)$  の形に  $\alpha$  が含まれる様がある  $l_0 \geq 1$  に対して,  
 上式の右辺  $> 0$  ならば, 任意の  $l_0 \geq l \geq 1$  に対して  $2$  もしくは  $2l_0$

である。  $l$  の各  $l$  に対して  $2$  多重度が  $2l+1$  あることとなる。

$\sum_{l=1}^{l_0} (2l+1) = l_0(l_0+2)$  に注意すると, 次の結果を得る。

### [VIII] 結果

ある  $l_0 \geq 1$  に対して

$$\min_{r_1 \leq r \leq r_2} \left\{ \left( \frac{1}{4r^5} + \frac{1}{2r^4} \right) \alpha^2 - \left( \frac{1}{2r^4} + \frac{9}{2r^3} \right) \alpha + \frac{4 - l_0(l_0+1)}{r^2} \right\} > \left( \frac{\pi}{r_2 - r_1} \right)^2$$

が成り立つならば、対応する対称ホウシノ流  $X^{(n)}$  は

少くとも  $l_0(l_0+2)$  次元の instability subspace を持つ。

此の instability subspace は  $X = X_r e_r + X_\vartheta e_\vartheta + X_\varphi e_\varphi$

$$X_\pm = X_\varphi \pm i X_\vartheta \quad \text{と} \quad (2)$$

$X_r = 0, X_\pm = \int_n^l(r) T_{\pm 1, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi), 1 \leq l \leq l_0, -l \leq n \leq l$   
 の形のベクトル場を張る  $l_0$  の集合。